

タイトル	北海道における中小企業家同友会の教育(6)
著者	竹田, 正直; TAKEDA, Masanao
引用	開発論集(100): 23-39
発行日	2017-09-29

## 北海道における中小企業家同友会の教育(6)

竹田 正直\*

### はじめに

北海道における地域経済の発展方向を探求する場合、とくに、中小企業の発展方向にかんする研究が欠かせない。就中、自らの加盟企業を着実に増加させて、今や、加盟企業数6,000社に迫り、北海道経済にますます大きな影響をあたえてきている一般社団法人北海道中小企業家同友会の分析と研究は、いっそう重要性をましてきている。すでに経営者会員は、全国都道府県に存在する中小企業家同友会全国協議会（中同協）のなかで全国第1位の組織数を誇っている。中小企業家同友会全国協議会（中同協）加盟会員数の13%を占めている。多くの経済や社会関係の全国指数のなかで下位をしめることの多い北海道の指数のなかで、北海道中小企業家同友会が組織数で第1位の13%も占めていることは、北海道経済の発展方向を如実に示しているといえる。

この組織的発展のかなめとなっているのが、「共育」をキーワードとした社員教育や経営者の自己教育、とくに、幹部養成の「同友会大学」の教育、さらに、「経営者大学」の活動である。

これまで筆者は、「北海道における中小企業家同友会の教育」のテーマで、同友会大学の発足の経緯や理念、また、同友会の活動全般とともに同友会大学の発足を主導した一人である大久保尚孝氏（北海道中小企業家同友会初代事務局長、専務理事、中同協社員教育委員会委員長、中同協副会長等歴任、故人）の活動の一端を分析してきた。同友会大学の第1期～第6期同友会大学の分析をもとに、本稿では、第7期と第8期同友会大学の分析を行う。これらの分析を通じて、「共育」概念の内実をさらに探求する。（注1）

### 第1章 北海道中小企業家同友会第7期同友会大学

#### (1) 第7期同友会大学の日程と講義概要

第7期同友会大学は、1984年（昭和59年）1月10日（火）18:00～21:00、から、1984年（昭和59年）5月10日（木）18:00～21:00、まで行われた。1月10日（火）は、開校式で、5月10日（木）は卒業式である。会場は、これまでと同じく、札幌市中央区北4条西16丁目の第一ビルの同友会事務局会議室である。

---

\*（たけだ まさなお）北海学園大学開発研究所特別研究員

第7期同友会大学の日程、単元のテーマ、講義テーマ、担当講師は、資料1で知ることが出来る。(注2)

講義回数は、開校式、I～VI単元(各単元4～6講義)、総括講義、卒業式を入れて31回で前回の第6期と同様である。また、毎週、火曜日と木曜日の夜、18～21時も変わらない。

単元のテーマ、第I単元「日本経済と中小企業」、第II単元「経営に関する法律問題」、第III単元「企業会計の基礎知識」、第IV単元「現代営業幹部論」、第V単元「科学技術論」、第VI単元「中小企業幹部論」も第6期と変わらないし、単元ごとの講義回数も変わっていない。

しかし、担当講師は、かなりの変化が見られる。

第I単元「日本経済と中小企業」の4人の講師は、すべて第6期と変わっていない。第II単元「経営に関する法律問題」の6人の講師のうち、半数の3人が変更されている。変更は、単元内の2講目、「日本国憲法の成立と今日的意義」の第6期の中村仁弁護士から第7期は、森越清彦弁護士に変わっている。単元内の3講目「商取引に関する法律知識」については、第6期の太田勝彦弁護士から第7期の田中敏久弁護士に変わっている。また、単元内6講目の「労働法の基礎知識」について第6期の後藤徹弁護士から第7期の伊藤誠一弁護士に変わっている。

第III単元「企業会計の基礎知識」の第6期の単元内3講目の「資金繰り表の作り方」の平田清二税理士がなくなっている。その分、第6期の「経営分析」の上村昭紀税理士の講義が、第7期では2回行われ、「経営分析～グループ研究～」が追加されている。

第IV単元「現代営業幹部論」は、4つの講義数と講義テーマは変わらないが、4人の講師のうち、3人変わっている。1講の「営業とは何か」が、(株)住まいのクワザワ社長山本正信氏から第7期では北海道同友会事務局長国吉昌晴氏へ変わっている。2講の「目標の設定と達成の手順と方法(1)」の(株)共同印刷(現、(株)アイワード)社長木野口功氏のみ継続している。3講の「営業幹部の任務と役割」は、第6期の(株)とんでん社長益川弘氏から、(株)土屋ホーム社長土屋公三氏に変わっているし、4講の「目標の設定と達成の手順と方法(2)」は、第6期の(株)札幌桜井鉄工所社長森岡木杉真氏から、(株)エミヤ商会社長三神純一氏へと変わっている。三神純一社長は、のちに、北海道同友会代表理事を永らく務めることになる。

第V単元「科学技術論」は、5講義のうち、2講義の担当講師が変わっている。変わったのは、1講の「科学と人間～自然科学の発展と人間生活とのかかわり～」の第6期の北海道大学助教授池内了氏から、第7期は北海道大学教授田中一氏になっている。もうひとり変わったのは、4講の第6期「生産管理について～作業管理、品質管理、工程管理など～」の北海道工業大学教授川島正治氏から、第7期の「生産管理について～日程、納期、在庫管理について～」の北海道大学助教授関口恭毅氏に変わっている。サブテーマも改訂されている。

第VI単元「中小企業幹部論」は、5つの講義数は変わっていない。1講に「幹部に必要な現代のマナー～営業と職場のマナーの再点検(1)～」が、第6期の北海道同友会事務局長国吉昌晴氏から、第7期は北海道同友会事務局次長西谷博明氏に変わっている。これは国吉氏が前述のように、単元IVの「営業とは何か」を担当することになったことと関連している。もうひとり

の変化は、単元Ⅵの3講の「教育とは何か～教育の目的と効果的な教育・学習方法について」第6期での北海道大学教授高村泰雄氏から、北海道大学教授竹田正直（筆者）に変わり、サブテーマが変わり「教育とは何か～社会と教育の発達の歴史～」とした。

以上が、単元構成、講義テーマ、担当講師の変化であるが、全体として単元構成や講義テーマはあまり変わらず、ある程度これまでの試行の結果、定着してきたことを示している。担当講師は、三分の一強の11人が変化している。

## (2) 第7期同友会大学の受講・卒業生の特徴

第7期の受講生は、53名が入学し46名が卒業した。卒業率は86.7%である。皆勤賞は26人で、卒業生中の皆勤率は56.5%であり、非常に高い。レポートと卒業論文の平均点が65点。平均80点以上で授与される優等賞が2名、浜松邦雄氏（㈱日本除雪機製作所、課長）と木下勝弘氏（建成興業㈱、課長）である。平均75点以上で授与される努力賞が5人も出ている。小西英俊氏（ダイヤ冷暖工業㈱、主任）、武内英一氏（兼長水産㈱、課長）、中澤謙氏（㈱宇佐美商会、主任）、早坂正男氏（㈱共同印刷、部長）、半澤力氏（北海道紙工業材料㈱、課長）である。（注3）第5期の受講生の60名のような多数ではないが、創立時の受講予定者数としては充分である。卒業した受講生の中で、札幌市以外からは、江別から3名、さらに、美唄1名、室蘭1名のほかに、なんと、上川町層雲峡からの受講生が1名いる。大雪山系の黒岳のロープウェーを管理する北海道林友観光㈱（現、㈱りんゆう観光）からの奥村富久氏である。車とJRにしてもおそらく、当時は片道約4時間ほどかかったであろう。帰宅は深夜12時をすぎる。

受講者の企業での役職は、取締役が5人で、内1人は代表取締役である。部課長・所長が23人で受講者の半数をしめている。企業の今と次代を担う上級幹部の学ぶ意欲や、送り出す経営者の同友会大学での学びへの積極的姿勢を感じる。

46名中、女性は白馬堂印刷㈱の安藤千代子氏ひとりであり、第6期同様、女性受講者は実に少ない。日本の社会と企業、とりわけ中小企業における役職者に占める女性幹部の少ない比率の反映である。さらに、女性にとって、家庭と職場の両立の困難な社会環境にあって、毎週2回、午後6～9時の受講と課題レポート5本と卒業論文の執筆は、今日以上に当時は難しかったであろう。女性受講者の増加は長期的な重要課題である。

安藤千代子氏は、実際にその苦労を次のように述べている。

「私は入学に際して、二つの目標を立てました。第一は全講義出席すること、第二は成績はさておいて卒業だけは絶対することです。同友会大学の受講を終えて帰宅すると夜の十時。最初は主婦業と両立できるのだろうか非常に不安でした。家庭の理解がなければ卒業は難しかったと思います。四ヶ月間小学生の息子に夕食用意してくれた夫に、感謝の気持ち一杯です。卒業証書はかけがいのない、私の一生の宝物になりそうです。」（注4）

また、受講者を送り出している企業の約四分の一は、複数の社員を受講させている。3人受講させている企業は、㈱土屋ホーム、㈱ナニワ、㈱北海道給食センターの3社である。2人の

資料 1 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第7期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1984年 1月10日(火)	開 校 式	◎学長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査， 一般教養テスト	
12日(木)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎経済学とは何か ～社会の発展と経済学の果たす役割～	北海道大学 教 授 森 杲氏
17日(火)	//	◎戦後日本経済史と中小企業の位置づ けについて	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
19日(木)	//	◎北海道経済の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
24日(火)	//	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
26日(木)	単元Ⅱ 経営に関する法律問 題	◎法とは何か ～判例にみる法の運用の研究～	札幌学院大学 教 授 鈴木 敬夫氏
30日(月)	//	◎日本国憲法の成立と今日的意義	弁護士 森越 清彦氏
2月2日(木)	//	◎商取引に関する法律知識	弁護士 田中 敏滋氏
7日(火)	//	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
10日(金)	//	◎ // (2)	同 上
14日(火)	//	◎労働法の基礎知識	弁護士 伊藤 誠一氏
16日(木)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎経営分析 (1)	税理士 上村 昭紀氏
21日(火)	//	◎経営分析 ～グループ研究～ (2)	同 上
23日(木)	//	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏
28日(火)	//	(特別講義) 企業の実力を判断する為には？ 危い会社の見分け方	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
3月1日(木)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	北海道同友会 事務局長 国吉 昌晴氏
6日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (1)	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
8日(木)	//	◎営業幹部の任務と役割	(株)土屋ホーム 社 長 土屋 公三氏
13日(火)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法 (2)	(株)エミヤ商会 社 長 三神 純一氏
15日(木)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活とのか かわり～	北海道大学 教 授 田中 一氏
22日(木)	//	◎コンピューターの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
27日(火)	//	◎現代の技術革新はどこまで進んでい るか ～社会の発展と技術の歴史～	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
29日(木)	//	◎生産管理について ～日程・納期・在庫管理について～	北海道大学 助教授 関口 恭毅氏
4月3日(火)	//	◎中小企業の技術開発 その発想と具 体例	(株)光合金製作所 社 長 井上 一郎氏
5日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー ～営業と職場のマナーの再点検～(1)	北海道同友会 事務局次長 西谷 博明氏
10日(火)	//	◎幹部に必要な現代のマナー ～話し言葉の再確認～ (2)	(株)北海道邦楽邦舞協会 (元HBCアナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
12日(木)	//	◎教育とは何か ～社会と教育の発達の世界～	北海道大学 教 授 竹田 正直氏
17日(火)	//	◎部下をどう教育するか ～"知恵"のある人間に育てるために ～ (1)	札幌学院大学 教 授 方波見雅夫氏
19日(木)	//	◎部下をどう教育するか ～現代人の社会心理と組織の活かし 方～ (2)	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
24日(火)	総 括 講 義	◎中小企業の未来と私たちの課題	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 5月10日(木) 18:00～21:00

## 資料 2

### 答 辞

私達同友会大学第7期生は、一面銀世界の1月10日に入学して以来、さわやかな春風の吹く4月24日まで、各3時間ずつ週2回、計30回の貴重な講義を受講させていただきました。

かえりみますと、非常に長く思われた4ヶ月間ではありましたが、5回のレポート作成と卒論の提出に追われ、終ってみればすでに5月の声を聞き、いかに短い期間であったかと驚嘆し、誠に感慨深いものがあります。これまでの「新聞、テレビを見ながら熱燗で一盃」という毎日から、「参考書を広げてレポート作り」の毎日に変じ、提出期限が迫ると朝の3時、4時まで、時には徹夜で仕上げた日もあったこと、そして平日には家族を早々と休ませ、日曜・祭日には夕方まで外出をうながして机に向ったことなど、非常に辛い毎日ではありましたが、私達が今までに経験したことのない、大変充実した日々を過ごすことができました。これもひとえに時には厳しく、時には優しく、真の愛情をもって御指導いただいた諸先生、繁忙期にもかかわらず勉学の機会を与えて下さった経営者の皆様、夜遅くまでお世話をいただいた同友会事務局の皆様の、温かいお心づかいと励ましのおかげでございます。こうして晴れの卒業の栄に浴したことに、卒業生一同に代わりまして心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

又、ご臨席の皆さまからいただきました温情溢れるお言葉に厚く御礼申し上げますと共に、そのお言葉ひとつひとつをかみしめ、糧として一層奮闘することを誓います。

80年代は今までの常識や価値観が根本的に変わるような激動の時代と言われております様に、私達をとり巻く経営環境は、経済的にも社会的にも非常に厳しいものがあります。同友会大学で学びました知識、知恵をフルに活用し、激動の時代こそ成長できるのだという気概をもって、企業経営を守り、発展させ、国民生活の安定と向上のために努力して行く所存でございます。

又、これからの企業は「経営規模の大小で優劣が決まるのではなく、人間の質が個々の企業の勝敗を決する」という教えを良く理解し、日本経済を真に担う中小企業を支える一員としての自覚と誇りを持って、今後とも学び続け、人間的成長をめざしていくことを決意し、答辞と致します。

1984年5月10日

北海道中小企業家同友会  
同友会大学第7期生代表  
株式会社 日本除雪機製作所  
浜松 邦雄

受講者を送りだしているのは、(株)サンコー、(株)ワコウ物産、白馬道印刷(株)、(株)とんでん販売、安全機器(株)、北舗建設(株)、総合商研(株)の7社である。これら複数受講者を出している10社の受講者合計が23人で、受講者全体の46人の丁度半数をしめている。このことは、これら企業の幹部養成への積極性と同友会大学への高い評価を感じるるとともに、他方で、すでに加盟企業が二千社を超え、道央圏でも千数百社に達している状況を考えると、幹部養成への加盟企業経営者間の意識の格差の解消による受講者を送り出す企業数の増加も長期的な重要課題である。

なお、優等賞を授与された浜松邦雄氏の「答辞」を掲載しておく。これには、受講生の苦勞や卒業の喜びと感謝、時代の状況とその中で成長し発展する決意が読み取れる。(注5)

### (3) 第7期同友会大学の卒業生への祝辞と願い

1984年5月10日(休)午後6時からの卒業式では、まず、同友会大学学長・社員教育委員長関口功四郎氏が次のように祝辞を述べている。「ご卒業おめでとうございます。(中略)心から“ご苦労様、良かったですね”と申し上げたいと思います。しかし、これは終わりではなく始まりです。(中略)同友会大学で学んだことをそれぞれの生き方の中で活かしてほしいと思います。会社も社会も家庭も貴方を必要とし、期待しているのですから。同友会の教育の基本理念は、皆さんが『豊かな人間性に裏打ちされた思想・知識・感性の持ち主』になってもらうことなのです。」(注6)

さすが、同友会大学学長・社員教育委員長として関口氏は、受講者へ温かい思いやりと祝意、そして今後への格調高い期待がのべられている。とくに、企業人としてだけでなく「豊かな人間性」が強調され、優れた社会人としての期待が語られている。そのあと、同期の友と連帯しつつも自主的に目標を定めることや、企業倒産がますます増える中、「会社を背負って立つ上級幹部」としておおいに期待されていると、次のように結んでいる。

「健康に留意して。生き甲斐のある人生を創られますように。最後に、同友会大学第七期生を暖かく支えて下さった父兄である経営者の皆さん、講師の先生方に厚くお礼申し上げます。」

受講生の生き甲斐ある人生への願いや、授業料を負担し、重要な幹部に週2日、定時もしくは早退などの時間保障をして送り出した経営者への感謝、講師への感謝など、実に行き届いた祝辞と言える。ただ、残念なのは、「父兄」である経営者という表現である。敗戦後、学校教育に導入されたPTAが、「父兄会」とされ、まもなく、「父兄会」は男尊女卑の文言として「父母会」となった。その後、片親や両親のいない子どもたちの増加から「保護者会」となり、今日、教育界の常識となっている。民主教育を守り発展させる民間の運動から用いだった「保護者」の表現は、今では、文部科学省も地方自治体・教育委員会も用いている。もっとも、同友会大学には、取締役やときには代表取締役が受講生となっていることもある。「保護者」である経営者、などのようにして学校教育からの類推であることを示しておくのが良いであろう。

北海道同友会専務理事の大久保尚孝氏は、卒業の祝辞と、前述の平均点や優等賞、努力賞などにふれて、「普通の大学であれば、きわめて優秀な成績だと思われます。」と高い評価をしている。「ただ、卒業論文についていえば、いまひとつもの足りなかった。中小企業のおかれている現状を歴史的に考察して、経済的・社会的・文化的・哲学的などあらゆる角度から総合的に中小企業の役割を明らかにし、今後、我々は何をなすべきかを明確にして欲しかったと思います。」(注7)さすが、大久保専務らしく、同友会加盟企業の幹部へのあくなき発達と尊敬をこめて訴えている。

北海道同友会代表理事三浦隆雄氏(株)サンコー社長)は、「同友会大学のグループ討論の様子が理事会で報告され、皆さんが一様に『しんどかった』、『死ぬ思いをした』という発言をされたと聞いて、今日こうして卒業式を迎えられた感激もひとしおだろうと拝察申し上げます。今回の第七期生で294名の同窓生になるとのことです。(中略)同友会大学の卒業で、もう勉強は

終りというのではなく、学んだ成果を生かして、更に一層精進して下さい。(中略)また今日授与された卒業証書は、家族をあげての協力と励ましのお陰でもあります。共に喜びを分かちあって下さい。」(注8) じつに、代表理事として凛としたなかにも受講者の心に寄り添った優しさあふれた祝辞と励ましの言葉である。ご夫妻ともども平和と人権、男女平等への社会貢献につくされた三浦さんの心情がにじみ出ている。

ついで、同友会大学第1期卒業生で同友会大学同窓会会長の岡村敏之氏(ダイヤ冷暖工業㈱常務、後に社長、会長)が、祝意を述べ、3年前の自らの受講時の「燃え上がるような情熱」にふれたうえて、次のように同窓会活動を紹介している。「皆さんは卒業すると同時に同期会を結成し、同窓会活動に参加することになります。同窓会には三つの申し合わせがございます。①同じ期の卒業生は同期会を結成し、同時に一期～七期の全体の同窓会に加わる。同期会は最低年一回自主的に開催し、お互いの近況を交流し勉強しあう。②同窓会全体の研修会を年二回開催し、一回は一泊研修会とする。③同友会が開催する研究会などに積極的に参加し、自らの資質を高め、学ぶ気風を職場に定着させる先頭に立つ。更に同友会の発展に貢献する。以上の三点です。同窓会は、皆さんを含めて約三百名の大世界になりました。自己の資質を高めるために、お互いにライバル意識をもって共に成長しましょう。尚、同窓会の研修会は、まちがってもレポートの提出はありませんので(笑い)安心してご参加下さい。」(注9) 第一期卒業生の岡村氏は、同窓会長として、同窓生が2,500名以上になった今日も活躍し発展している同窓会の基礎を築くと共に、後に、長く名学長として同友会大学の発展に多大な寄与をなした方である。自分自身の受講の情熱をふりかえり、同窓会を通じての今後の活動について適切な説明を行っている。しかも、ユーモアをまじえての受講生を惹きつける魅力はさすがである。

## 第2章 北海道中小企業家同友会第8期同友会大学

### (1) 第8期同友会大学の日程と講義概要

第8期の同友会大学は、1984年7月12日(木)の開校式から同年11月8日(木)の卒業式まで行われた。会場は、従前通り第1ビル会議室である。卒業式のみは、北海道林友観光㈱(現、㈱りんゆう観光)3階ホールである。

第I単元から第VI単元までの単元構成は同じだが、第II単元のみ若干のテーマ変更がある。従来の「経営に関する法律問題」から、「経営と法律」に変わっている。法律をより広い視野で把握しようとの意識と思われる。もっとも、第7期の5人のうち、第8期での変更は一人である。

次に各単元の担当講師やテーマの変更を見る。第1単元「日本経済と中小企業」は、このところ安定したテーマと講師であったが、第8期はいくつかの変化が見られる。1講目は第5期から、「経済とは何か」と基本的な問いをかかげて、第5期は美土路教授が、第6・7期は、北海道大学経済学部森教授が担当してきたが、森教授はテーマを変えて5講目になっている。変

わって第7期で2講目に「戦後日本経済史と中小企業の位置づけについて」を担当していた北海道教育大学三好宏一教授が1講目となり「社会発展史と経済学」のテーマで担当している。

(注10)

第1単元第2講目は、道外から、明治大学教授渡辺睦氏をよび「戦後日本経済と中小企業」のテーマで担当している。その後このような道外講師の招聘が時々みられるが、多くの場合、同友会大学同窓会の研修講演会と兼ねていることが多い。

第3講目の北海道大学山田定市教授と第4講目の佐々木隆生助教授(後に教授)の講義はテーマも順序も同じである。第5講目に、第7期ではじめに「経済とは何か」を講義した前述の森教授が、テーマを「現代の情勢をどう理解するか〜グループ討議〜」と変えて担当している。

なお、サブテーマに「グループ討議」とあるが、第II単元の「経営と法律」以外のすべての単元で1回の「グループ討議」又は「グループ研究」が導入され、全体で卒業までに5回行われる。この受講生参画型の授業形態はその後、続いて取り入れられてゆく。筆者は、第7期の第VI単元で初めて同友会大学の講義を担当した。その講義で、この参画型の授業形態を導入して活発な討論が行われたが、この授業が契機となって広く導入されたとすれば嬉しい限りである。

さて、第8期の第II単元の変更は少なく、第7期で第1講目の札幌学院大学鈴木敬夫教授の「法とはなにか?〜判例に見る法の運用の研究〜」が開講されなくなり、この単元の講義は6つから5つへと減少している。これは、前述の明治大学渡辺睦教授を招聘したことによる削減である。また、第7期の第2講目の「日本国憲法の成立と今日的意義」森越清彦弁護士の講義が、「日本国憲法の性格と今日的意義」郷路征紀弁護士の講義に変わっている。他は同じである。

第III単元は、テーマの担当講師も変わっていないが、講義の順序のみ変わっており、日程上の問題と推察される。

第IV単元は、担当は加盟企業の経営者が担当しており、毎回ほとんどを交代するのが普通である。第8期も第2講目の(株)共同印刷(現、(株)アイワード)木野口功社長(現、会長)以外は3人とも交代している。新たな担当講師は、第1講目の「経営とは何か」札幌第一興産(株)社長武田耕作氏、第3講目「営業幹部の任務と役割」はタナカ化学(株)社長田中志朗氏が新たに担当し、第4講目は、テーマも変えて「営業力アップのために〜グループ研究〜」を白馬堂印刷(株)社長花井馨氏が担当することとなった。

第V・VI単元は、変更が少なく、第V単元では、北海道大学助教授池内了氏「科学技術の発展と今日的課題〜グループ研究〜」と、第VI単元の北海道教育大学教授小田切正氏の「部下をどう教育するか(2)〜現代青年の意識と行動〜」である。

## (2) 第8期同友会大学の受講・卒業生の特徴

各期とも社員教育委員会による卒業判定についての総合評価のまとめを専務理事の大久保尚孝氏がおこなっているが、その卒業式での恒例の大久保氏の評価では、第8期の入学者は44名

資料3 北海道中小企業家同友会「同友会大学」講義カリキュラム（第8期）

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
1984年 7月12日(休)	開 校 式	◎学長あいさつ，教育委員会の紹介， ガイダンス ◎班編成の発表，性格・職業興味検査	
17日(火)	単元Ⅰ 日本経済と中小企業	◎社会発展史と経済学	北海道教育大学 教 授 三好 宏一氏
19日(休)	//	◎戦後日本経済と中小企業	明治大学 教 授 渡辺 睦氏
23日(月)	//	◎北海道の歴史と産業構造の特徴	北海道大学 教 授 山田 定市氏
26日(木)	//	◎世界の政治・経済情勢の焦点	北海道大学 助教授 佐々木隆生氏
31日(火)	//	◎現代の情勢をどう理解するか ～グループ研究～	北海道大学 教 授 森 杲氏
8月2日(休)	単元Ⅱ 経営と法律	◎日本国憲法の性格と今日的意義	弁護士 郷路 征記氏
7日(火)	//	◎民・商法の基礎知識	弁護士 田中 敏滋氏
9日(休)	//	◎債権の管理・回収について (1)	弁護士 向井 清利氏
14日(火)	//	◎ // (2)	同 上
16日(休)	//	◎労働法の基礎知識	弁護士 伊藤 誠一氏
21日(火)	単元Ⅲ 企業会計の基礎知識	◎企業の実力を判断するために ～危い企業の見分け方～	(株)帝国データバンク 札幌支店長 大宮 辰男氏
23日(休)	//	◎経営分析 (1)	税理士 上村 昭紀氏
28日(火)	//	◎経営分析 ～グループ研究～ (2)	同 上
30日(休)	//	◎企業税務の基礎知識	税理士 加城 忠重氏

日 程	単 元	講 義 テ ー マ	講 師
9月4日(火)	単元Ⅳ 現代営業幹部論	◎営業とは何か	札幌第一興産(株) 社 長 武田 耕作氏
6日(木)	//	◎目標の設定と達成の手順と方法	(株)共同印刷 社 長 木野口 功氏
11日(火)	//	◎営業幹部の任務と役割	タナカ化学(株) 社 長 田中 志朗氏
13日(木)	//	◎営業力アップのために ～グループ研究～	白馬堂印刷(株) 社 長 花井 馨氏
17日(月)	単元Ⅴ 科学技術論	◎科学と人間 ～自然科学の発展と人間生活～	北海道大学 教 授 田中 一氏
20日(木)	//	◎現代の技術革新はどこまで進んでいるか ～社会の発展と技術～	北海道大学 助教授 吉田 文和氏
21日(金)	//	◎科学技術の発展と今日的課題 ～グループ研究～	北海道大学 助教授 池内 了氏
25日(火)	//	◎コンピュータの基礎概念 ～情報化時代への対応～	北海道大学 教 授 青木 由直氏
27日(木)	//	◎中小企業の技術開発 ～その発想と具体例～	(株)光合金製作所 社 長 井上 一郎氏
10月4日(木)	単元Ⅵ 中小企業幹部論	◎幹部に必要な現代のマナー (1) ～営業と職場のマナーの再点検～	北海道同友会 事務局長 西谷 博明氏
9日(火)	//	◎部下をどう教育するか (1) ～現代人の社会心理と組織の活し方～	北海学園大学 教 授 後藤 啓一氏
11日(木)	//	◎幹部に必要な現代のマナー (2) ～話し言葉の再確認～	(株)北海道邦楽舞協会 (元HBCアナウンスアカデミー所長) 事務局長 平沢 秀和氏
16日(火)	//	◎部下をどう教育するか(2) ～現代青年の意識と行動～	北海道教育大学旭川分校 教 授 小田切 正氏
19日(金)	//	◎“知恵”のある人間に育つために	札幌学院大学 教 授 方波見雅夫氏
23日(火)	//	◎中小企業の未来と私たちの課題 ～同友会大学で何を学んだか(グループ討論)～	北海道同友会 専務理事 大久保尚孝氏

※ 卒論の提出を課す

※ 卒業式は総括講義後2週間目に行う 11月8日(木) 18:00～21:00



## 資料 4

## 答 辞

シベリヤからの冷い季節風が街中の木々の葉を吹き飛ばし、再び荒涼たる世界が私達の眼前に広がります。

ここに本日、同友会大学第8期生の卒業式を迎え、御臨席の皆様から温情溢れる御祝辞と御指導を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

例年になく厳しい暑さの中で私達は入学しました。最初は長く苦しく思われた4ヶ月間も、終ってみれば、「何と短い期間であった事か」と感慨深い想いが致します。

一日の仕事の疲れのあとの受講は、決して楽なものではありませんでした。しかし情熱あふれた諸先生の興味深い講義に、いつの間にか眠気も吹き飛び、引き込まれていきました。

4ヶ月を通じて最も大変だったのは、6回のレポートでした。常日頃の勉強不足がたたって、いつも朝の3時・4時、果ては、徹夜で参考文献と首っぴきで、やっとレポートを仕上げるという有様だったので

す。こうして苦しみ抜いた後の充実感と、満足感を味わい、努力や日常不断の学習の大切さを学ぶ事ができました。

この経験により、「帰って、一杯飲んで寝る」生活から、少しずつでも学習する習慣が身についたような感じがします。

私達は同友会大学に於いて、日本の中小企業が置かれている現状を、グローバルに、歴史的に、系統的に学びました。そして地域の人々の豊かな暮らしづくりに貢献し、地域の信頼を得て、共に、平和で人間らしい社会を創り上げていくことこそ、私達の社会的使命であり、ここに中小企業の活路があるということに確信を深めました。

私達は、同友会大学で学んだことを、自らの血肉とし、どんな局面を迎えようとも、卒業生の誇りにかけて、企業を守り、情勢の要求に応じていく決意です。

そして卒業生一同は、これからも連帯の輪を広げてゆくようにしたいと存じます。

最後に、私達36名が、こうして卒業出来ますのも、不肖の弟子となりました私達に、かくも御熱心に御講義下さいました諸先生、業務多忙なこの時期に派遣して下さいました経営者の皆様、日夜遅くまでお世話下さいました事務局の皆様、更には、多大な犠牲を払って送り出してくれた職場の仲間の温い御指導、御援助の賜と深く感謝致しております。

ここに厚く御礼申し上げまして答辞と致します。

1984年11月8日

北海道中小企業家同友会  
同友会大学第8期生代表  
シオン・樹脂工業株式会社  
浅井規夫

「卒業おめでとうございます。四ヶ月にわたる同友会大学が、みなさんの人生にプラスになったことと確信致します。人間にとって大事なことは、その人がどういう存在価値を持つかにあります。(中略)他人の頼りになる、信頼される人にならなければなりません。そのために大事なことは信念と自信を持てる人になることです。同友会の学びはその基盤となることでしょう。同友会の教育はハウツウに焦点をおきません。どんな事態にも、適切に対応していけるベーシッ

クな能力を養成することが眼目です。ですから、今日が終りではなく、今日がはじまりになるのではないのでしょうか。(中略)どうか、実力をつけ、よい成果を上げて、人に期待される人生をつくっていただきたい。」(注14)

関口功四郎学長は、人間存在の大事なこととして「他人の頼りになる、信頼される人になる」ことをあげているが、同じことを今から百年以上も前に、ロシアの文豪レフ・トルストイが、「В жизни есть только одно несомненное счастье — жить для другого.» (Л.Н.Толстой),「人生においてただひとつの疑うことのできぬ幸福は、他人のために生きることである。」(注15)と、同じ人生の価値を述べていた。

関口学長は、そのためにも、同友会の教育は、ハウツウに重点をおくのではなく、ベーシックな能力を養うことを目指していると激励している。

北海道同友会代表理事三浦隆雄氏(㈱サンコー社長)は、祝意を述べ、卒業は、受講生の努力とともに、上司、同僚、関係社員、家族のおかげであり、共に喜びを分かち合って欲しい。「みなさんは四ヶ月間苦勞した中で、他社の優秀な幹部の方とお知り合いになりました。今後、同窓生として、密接な交際を続けていただくようお願いいたします。またそれぞれ、友人であるとともにライバルであるということもあわせてお考え願いたいと思います。同友会大学を人生のジャンプ台にして、より一層研鑽に励んでください。健闘を祈ります。」と、今後の同窓会活動の重要性にもふれている。

同友会専務理事の大久保尚孝氏は、第8期性は、前述のように平均点最下位など、厳しい状況を指摘し、さらに、参考文献を自分で探すのではなく、「講義ノートの範囲内で原稿用紙を埋めて、何とか逃れようというスタイルのレポートが圧倒的に多かったようです。更に厳しいことを重ねて言いますが、遅刻や途中退席がかなり目立ち、学徒らしい謙虚さが今回は希薄だったような気がします。」大久保氏は、このような背景として、経営者から「期待しているよ」といわれて「自分の力を過信」し、「一面的、主観的評価」を自分にしているのではないかと鋭く指摘し、「それぞれの職場で皆さんはエースとして期待されています。知らず知らずのうちに体に宿った病魔を、自ら発見し追い出す、そういう崇高な戦いに今日から積極的に取り組んでいただくことをお願いしたいと思います。」

第8期単元Ⅳの講師であった田中志郎氏(タナカ化学㈱社長)が、祝意を述べたのちに、「さらにみなさんは、企業人としての手腕が問われる前に、人間として社会的に信頼される人物であることが要求されます。仕事と人生との関わりをしっかりと自覚し、仕事の中によるこびや生きがいを見いだすことのできる有能な幹部になってください。」と、同友会の教育の真髄にふれてはげましている。(注16)

第Ⅲ単元の講師であった税理士上村昭紀氏も祝辞をのべたうえで、最近の統計で社歴の長い企業の倒産が多い傾向があるが、再建支援の中で分かった倒産原因は、「環境に適應する人材を育てていないこと、それと現状に甘んじていること」であると述べ、「教育力のある企業が生き残る」と言われていると指摘している。経験に基づく重要な指摘である。

なお、今回、道外から招聘された明治大学教授渡辺睦氏が、卒業祝いにメッセージをよせた。渡辺教授は、祝意や支援の方々への感謝、「共育」理念を高く掲げて同友会大学を運営している北海道同友会とその社員教育委員会に敬意を示している。さらに、「中小企業は常に大企業と比べて見劣りする“経済的弱者”、あるいは従属的地位にとどまるものではありません。日本の中小企業は、他国の中小企業には見られない創造力とたくましい活力を持って、社会的にも、経済的にも、きわめて大きな役割を果たしてきました。中小企業の繁栄無くして、国民生活の安定と向上は望めません。」と、中小企業研究者としての励ましと展望を提示している。

祝辞の終わりに、同友会大学同窓会副会長吉田永氏（㈱住まいのクワザワ営業推進室長）が、祝意と自分も第2期生であった当時の苦勞を語り、「皆さんは卒業すると同時に同期会を結成し、同窓会活動に参加することになります。このたび第8期生を迎え、総勢330名となります。大きなパワーとなることと思います」とのべ、第7期で岡村同窓会長が述べた3点の「申し合わせ」を紹介した。（注17）

## おわりに～“共育”活動について～

北海道中小企業家同友会は、1969年に設立され、あと2年で60周年を迎えるが、すでに、6,000名に近い道内中小企業のトップが加盟し、かつ、1973年の中小企業家同友会全国協議会（中同協）の第5回全国総会（愛知）に同友会の3つの目的を提案して採択されたが、その2点目に「“共育”活動」がふくまれており、以来、「共育」が中同協の社員教育の基本用語となってきた。

筆者は、前号（紀要第99号）に次のように記した。

「北海道中小企業家同友会が、中同協5回全国総会（愛知）で、社員教育を『共育』と提起した『共育』を、いつから、どういう経緯と意味で用い始めたかは未解明の課題である。竹田自身は、1964年12月25日公開の雑誌論文で提起している。『教育は“共育”であり、教育の主人公は生徒である』と書き、“共育”は集団を教育する際のカナメともいえる概念であるとし、第1に集団の成員相互の訓育作用であり、第2に、教育者と教育を受けるものとの相互の訓育作用である、という2つの内実を有する概念としておよそ63年前から、つまり、中同協や北海道同友会の結成以前から用いている。その後、さらに、ヴィゴツキーの知識の最近接領域論にもとづく人間の発達メカニズムとも関連して論じている。」（注18）

第7期では、三浦隆雄北海道同友会代表理事が、卒業式の祝辞のなかで、7期生の46名の卒業生を含めると同窓会は296名となり、10年後には、優秀な同窓生が千名を超えるのではないかと、「我々経営者もいつ経営者の椅子」を失うかの「危機感がキッカケになって経営者大学も生まれたのです。」と述べているが、これは、まさに、社員教育の主役たる経営者が「共育」され、制度的な影響として経営者大学誕生の一要因となったことを示している。（注19）

大久保尚孝専務理事は、7期の卒業式の祝辞で、同窓生となる同友会大学卒業生に、「共育」

活動の新しい、具体的活動も提案している。「これから、同友会大学卒業生の皆さんと同窓会とは密接に関係を持って参ります。特に各種研修会での講師・レポーター・座長などをお願いすることもあろうかと思いますが、経営者の方ともよく話して、ぜひ気持ちよくご協力下さい。それがまた、今まで学んだものを更にグレードアップするチャンスです。」(注 20)

同友会大学での「共育」活動が、家庭で、子どもたちへも「共育」的役割を果たした事例を、7期生卒業生の石田弘昭氏(株)サンコー営業所長)が書いている。「同友会大学に入学して私の生活は一変しました。『テレビを見ながら、晩酌をして寝るだけ』という毎日から、小学生の子供部屋を占拠し、ねじりはちまきで勉強する毎日へと大きく変わったのです。一番驚いたのは、小学校の息子です。『お父さんどうしたの?』と不思議そうに聞かれてしまいました。「石田のお父さん目の色変えて勉強している」というので息子の友だちが見学に来たのには、びっくりしました。親の生きる姿勢が家庭教育にとっていかに大事か学んだ思いです。」(注 21)

このような家庭での「共育」は、8期卒業生にもみられます。田中敏「は、「会社から帰ってきて、本を読みノートを整理する毎日。土曜、日曜は原稿用紙に向かわなければなりません。そんなわたしの姿を見て、影響されたのでしょうか。子供が勉強するようになりました。『子は親の鏡』ということばを、噛み締めております。」(注 22)

残念ながら、第7、8期では、従来あった講師が受講生からの学びの具体的記述や、受講生どうしの「共育」の具体例は、資料上なかった。ただ、筆者が担当した講義では、受講生全体の討議やグループ討議を随時入れて講義をすすめたので、講義のプロセスで“共育”活動を行った。しかし、第8期では、せっかく「グループ討議、研究」が導入されたのにその効果を検証資料がなく分析できなかつたのが、今後の課題である。

## 注

(注 1) 竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 90 号, 2012 年 9 月刊, 21~39 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(2)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 92 号, 2013 年 9 月刊, 141~160 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育と大久保尚孝氏」, 中小企業家同友会全国協議会企業環境研究センター編『企業環境研究年報』, 第 18 号, 企業環境研究センター刊, 2013 年 12 月 30 日, 81~96 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(3)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 94 号, 2014 年 9 月刊, 19~32 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(4)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 96 号, 2015 年 9 月刊, 1~15 頁。竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(5)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 99 号, 2017 年 3 月刊, 57~73 頁

(注 2) 西谷博和責任編集『同友会大学第 7 期生記録集, “変革”』, 北海道中企業家同友会社員教育委員会発行, 1984 年 6 月, 9~10 頁。なお, 講義カリキュラムは「資料 1」として掲載する。

(注 3) 前掲同, 2~3 頁。

(注 4) 安藤千代子「家庭の協力と励ましに支えられて」, 前掲同, 76 頁。

(注 5) 前掲同, 77 頁。浜松邦雄氏の「答辞」は、「資料 2」として掲載する。「日々を過す」はママ。複数受講や女性受講の数はあくまで卒業生の中の数である。以下同じ。

- (注 6) 前掲同, 1 頁。
- (注 7) 大久保尚孝「同友会大学で得られた成果をこれからの仕事に生かそう」, 前掲同, 2 頁。
- (注 8) 三浦隆雄「学んだ成果を生かした更に精進を」, 前掲同, 7 頁。
- (注 9) 岡村敏之「ライバル意識をもって共に成長を」, 前掲同。
- (注 10) 西谷博和责任編集『同友会大学第 8 期生記録集, “礎”』, 北海道中小企業家同友会社員教育委員会発行, 1984 年 12 月, 10~11 頁。なお, 講義カリキュラムは「資料 3」として掲載する。単元 III 8 月 30 日の担当は「加城」とあるが, 「加城」が正しい。
- (注 11) 大久保尚孝「学びを糧とし, 職場に新風を吹き込もう」, 前掲同, 2 頁。
- (注 12) 「同友会愛学第 8 期卒業生名簿」, 前掲同, 66~67 頁。
- (注 13) 浅井規夫「答辞」, 前掲同, 65 頁。「資料 4」参照。
- (注 14) 関口功四郎「信念と自信の持てる人になろう」, 前掲同, 2 頁。
- (注 15) 東郷正延著『ロシア語のすすめ』, 講談社, 1966 (昭和 41) 年 11 月, 第 1 刷, 1968 (昭和 43) 年 10 月, 第 6 刷, 194 頁。
- (注 16) 三浦隆雄「同友会大学は人生のジャンプ台」, 大久保尚孝「学びを糧とし, 職場に新風をふきこもう」, 田中志郎「初心を忘れず有能な幹部になろう」, 西谷博和责任編集『同友会大学第 8 期生記録集, “礎”』, 同, 2~8 頁。
- (注 17) 上村昭紀「同友会大学の成果を毎日の仕事に生かそう」, 渡辺睦「夢とロマンにあふれた中小企業を築こう」, 吉田永「学びの先頭に立とう」, 前掲同, 7, 9 頁。
- (注 18) 竹田正直「北海道における中小企業家同友会の教育(5)」, 北海学園大学開発研究所『開発論集』, 第 99 号, 2017 年 3 月刊, 57~73 頁 (うち上記引用部分は 71 頁)。
- (注 19) 三浦隆雄「学んだ成果を生かした更に精進を」, 第 7 期生記録集, 前掲同, 7 頁。北海道中小企業家同友会前代表理事三神純一氏は, 「中小企業大学校」が札幌でなく旭川に創設されたこととも, 同友会大学や経営者大学の創設に関係していると筆者に述べていた。
- (注 20) 大久保尚孝「同友会大学で得られた成果をこれからの仕事に生かそう」, 第 7 期生記録集, 前掲同, 2 頁。
- (注 21) 石田弘昭「同友会大学とは親と子の共育」, 前掲同, 21 頁。
- (注 22) 田中敏「親の勉強する姿をみて子供もヤル気をだす」, 第 8 期生記録集, 前掲同, 20 頁。